15　　かぐや姫の抵抗　　　 　　文法　敬語①　最高敬語・絶対敬語・自尊敬語

読解　行動の理由をつかむ

新傾向 関連資料と読み比べる

かぐや姫に求婚を拒否されたものの諦めきれない帝は、かぐや姫を育てたと相談して、彼女に気づかれないように家を訪れることにした。

　帝、にはかに日を定めて御狩りに出で給うて、かぐや姫の家に入り給うて、見給ふに、光満ちて㋐清らにてゐたる人あり。①これならむとして、逃げて入るをとらへ給へば、をふたぎて候へど、めよく御覧じつれば、なくめでたくおぼえさせ給ひて、「許さじとす」とて、率ておはしまさむとするに、かぐや姫答へてⓐ奏す。「おのが身は、この国に生まれて侍らばこそ使ひ給はめ、いと率ておはしましがたくや侍らむ」と奏す。帝、「②などかさあらむ。なほ率てⓑおはしまさむ」とて、を寄せ給ふに、このかぐや姫、きと影になりぬ。はかなく㋑口惜しと思して、げにただ人にはあらざりけりと思して、「さらば、御には率て行かじ。の御かたちとなり給ひね。それを見てだに帰りなむ」とⓒ仰せらるれば、③かぐや姫、元のかたちになぬ。

* 語注

面をふたぐ＝顔を覆う。

使ふ＝ここでは、宮仕えさせるの意。

影＝実体が存在しないにも関わらず、何となく姿が見えるもの。

【原文】

　帝、にはかに日を定めて御狩りに出で給うて、かぐや姫の家に入り給うて、見給ふに、光満ちて清らにてゐたる人あり。これならむと思して、逃げて入る袖をとらへ給へば、面をふたぎて候へど、初めよく御覧じつれば、類なくめでたくおぼえさせ給ひて、「許さじとす」とて、率ておはしまさむとするに、かぐや姫答へて奏す。「おのが身は、この国に生まれて侍らばこそ使ひ給はめ、いと率ておはしましがたくや侍らむ」と奏す。帝、「などかさあらむ。なほ率ておはしまさむ」とて、御輿を寄せ給ふに、このかぐや姫、きと影になりぬ。はかなく口惜しと思して、げにただ人にはあらざりけりと思して、「さらば、御供には率て行かじ。元の御かたちとなり給ひね。それを見てだに帰りなむ」と仰せらるれば、かぐや姫、元のかたちになりぬ。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

〔　　〕は、〔　　〕に満ちた様子で座っている〔　　　　　〕に心を奪われた。〔　　　〕を用意し、連れ帰ろうとしたが、彼女は〔　　　　〕の者でないことを理由に拒み、〔　　〕になった。その様子を見た〔　　〕は彼女のことを断念せざるを得なかった。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ（終止形でよい）。〈３点×２〉

㋐〔　　　　　　　　　　〕　㋑〔　　　　　　　　　　〕

問三　二重線部ⓐ〜ⓒの敬語の種類を答えよ。また、誰から誰に対する敬意かを答えよ。〈２点×３〉

ⓐ〔　　　〕／〔　　　〕から〔　　　〕　ⓑ〔　　　〕／〔　　　〕から〔　　　〕

ⓒ〔　　　〕／〔　　　〕から〔　　　〕

問四　チェック問題　［敬語①　最高敬語・絶対敬語・自尊敬語］

⑴次の傍線部の説明として最も適当なものを選べ。〈１点×３〉

１　女院は今更いにしへを思し召し出ださせ給ひて、…　 （平家物語）

２　よきに奏し給へ、啓し給へ。　　　　　　　　　　　　 （枕草子）

３　（後白河法皇自身の言葉）「ただ夢とのみこそ思し召せ」　 （平家物語）

ア　絶対敬語　　イ　自敬表現（自尊敬語）　ウ　最高敬語（二重敬語）

１〔　　　〕　２〔　　　〕　３〔　　　〕

⑵次の傍線部を現代語訳せよ。 〈１点×２〉

１　親王、大殿ごもらで明かし給うてけり。　　　　　　　 （伊勢物語）

２　大宮の御前にて、「恨み聞こえさせ給ふ」と啓せむ。　 （源氏物語）

　１〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

２〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問五　傍線部①を、主語を補って現代語訳せよ。 〈４点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問六　傍線部②における「帝」の様子の説明として最も適当なものを選べ。 〈５点〉

ア　かぐや姫が帝である自分の命令に従わないことに困惑する様子。

イ　求婚を断ろうとするかぐや姫の発言に、疑問を抱いている様子。

ウ　話をはぐらかし自分にかないかぐや姫に、一層かれている様子。

エ　かぐや姫の言っていることを全く信じようとしないでいる様子。

〔　　　〕

問七　傍線部③とあるが、それはなぜか。三十字以内で答えよ。〈12点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問八　本文の内容に合致するものを一つ選べ。〈７点〉

ア　かぐや姫は、狩りの途中に立ち寄った帝に見つけられないようにそっと姿を消してしまった。

イ　かぐや姫は、帝を慕いつつもその求婚を受けるわけにはいかない自分の境遇を恨めしく思った。

ウ　かぐや姫は、帝の意向に従わずにさっと姿を消し、その様子を見た帝は彼女がこの国の人でないことを悟った。

エ　かぐや姫は、帝の求婚を拒否したことに罪悪感を覚え、せめて真実を告白して許しを請おうと思った。

〔　　　〕

問九　本文と、本文後半の同場面である【資料】『今昔物語集』との読み比べをした後の【会話文】のうち、適当でないものを一つ選べ。ただし、「帝」と「天皇」の呼び方については、「帝」に統一している。〈５点〉

【資料】

女の申さく、「我、后とならむに、限りなき喜びなりといへども、まことには、おのれ、人にはあらぬ身にて候ふなり」と。天皇ののたまはく、「なんぢ、されば、何者ぞ。鬼か神か」と。女のいはく、「おのれ、鬼にもあらず、神にもあらず。ただし、おのれをば、ただ今、空より人来て迎ふべきなり。天皇すみやかに帰らせ給ひね」と。天皇、これを聞き給ひて、「こは、いかに言ふことにかあらむ。ただ今、空より人来て迎ふべきにあらず。これは、ただわが言ふことをびむとて言ふなめり」と、しばしばかりありて、空より多くの人来て、を持て来て、この女を乗せて空に昇りにけり。その迎へに来たれる人の姿、この世の人に似ざりけり。そのときに天皇、「実にこの女はただ人にはなき者にこそありけれ」として、宮に帰り給ひにけり。

【会話文】

ア　生徒Ａ―帝は、かぐや姫が普通の人ではないことを、本文ではかぐや姫の力を目の当たりにすることで知るけれど、【資料】では空から迎えに来た多くの人の姿を見て知るよね。こういう場面がＳＦ映画みたいで好きだなあ。帝はずいぶん驚いただろうし、とまどっただろうね。

イ　生徒Ｂ―でも帝がやはり権力者であるということは、本文のかぐや姫に心を奪われ「逃げるなんて許さないよ」と連れていこうとするところや、【資料】の、帝が自分自身を神に見立ててかぐや姫の言葉を聞き入れないところなど、自信たっぷりの言動からうかがえるね。

ウ　生徒Ｃ―本文は帝が狩りに出るという口実を使って突然翁の家を訪問し、かぐや姫を見ようと強引な手段をとるところがドラマチックで好きだなあ。一方【資料】の帝は、自分の申し出を断るためにかぐや姫はをついていると思って信用しない。こんな人は嫌だなあ。

エ　生徒Ａ―対してかぐや姫は、本文では「私はこの国に生まれたのではないので連れて帰るのは難しいでしょう」と言ったり、【資料】では「私は、后になるのは大変うれしいけれど、人間ではないのです」と告げたりして、丁重な言い方の中にも帝に靡かない強さを感じるよね。

オ　生徒Ｃ―そうしたかぐや姫に対して【資料】の帝は、最後に「普通の人ではなかったのだな」と思うだけなのに、本文の帝は「それほどいやなら連れていかない」「せめて最後に姿だけでも見て帰ろう」とかぐや姫の意志をくみとって声をかける。やっぱりこの帝の方が魅力的だなあ。

〔　　　〕

【解答】

問一　帝／光／かぐや姫／御輿／この国／影／帝

問二　㋐＝美しい　㋑＝残念だ〈３点×２〉

問三　ⓐ＝謙譲・作者から帝

　　　ⓑ＝尊敬・帝から帝

　　　ⓒ＝尊敬・作者から帝〈２点×３〉

問四　⑴　１＝ウ　２＝ア　３＝イ〈１点×３〉

　　　⑵　１＝おやすみにならないで　２＝申し上げよう。〈１点×２〉

問五　帝はこれであろうとお思いになって、〈４点〉

問六　エ〈５点〉

問七　帝が自分を連れて行かず、元の姿を見たら帰ると言ったから。（28字） 〈12点〉

問八　ウ〈７点〉

問九　イ〈５点〉

【現代語訳】

帝は、急に日を決めて御狩りにお出かけになって、かぐや姫の家にお入りになって、ご覧になると、光が満ち（輝い）て美しい様子で座っている人がいる。（帝は）これ（があのかぐや姫）であろうとお思いになって、逃げて（部屋の奥に）入る（かぐや姫の）袖をとらえなさると、（かぐや姫は）顔を（袖で）覆っておそばにいるが、はじめによくご覧になっ（てい）たので、比類なく素晴らしくお感じになって、「許しはしないつもりだ」とおっしゃって、連れていらっしゃろうとすると、かぐや姫が答えて申し上げる。「私の身は、もしこの国に生まれてございますならば宮仕えさせなさる（こともできる）だろうが、（そうではないので）とても連れていらっしゃるのは難しくございましょうか」と申し上げる。帝は、「どうしてそのようなことがあるだろうか、いやない。やはり連れていらっしゃるつもりだ」とおっしゃって、御輿を（邸に）お寄せになると、このかぐや姫は、さっと影のようにぼんやりとしたものになって（姿を消して）しまった。（帝は）むなしく残念だとお思いになって、本当に普通の人ではないのだなあとお思いになって、「それならば、御供としては連れて行くまい。（だから）元のお姿になってください。せめてそのお姿を（もう一度）見るだけでも（してから）帰ろう」とおっしゃると、かぐや姫は、元の姿になった。

【補充問題】（＊行数は本書に対応）

問１　次の傍線部の助動詞の文法的意味を答えよ。

①類なくめでたくおぼえさせ給ひて（３行目）

②げにただ人にはあらざりけり（７行目）

③御供には率て行かじ。（７行目）

④元の御かたちとなり給ひね。（７～８行目）

⑤仰せらるれば、（８行目）

問２　傍線部の主語をそれぞれ答えよ。

①「逃げて入る袖を」（２行目）

②「とらへ給へば」（２行目）

③「面をふたぎて候へど」（２～３行目）

④「初めよく御覧じつれば」（３行目）

問３　現代語訳せよ。

①「おのが身は、この国に生まれて侍らばこそ使ひ給はめ、」（４～５行目）

②「などかさあらむ」（５行目）

③「げにただ人にはあらざりけり」（７行目）

④「さらば、御供には率て行かじ」（７行目）

⑤「それを見てだに帰りなむ」（８行目）

問４　「許さじとす」（３行目）とはどういうことか。簡潔に答えよ。

【補充問題解答】

問１　①尊敬　②詠嘆　③打消意志　④完了　⑤尊敬

問２　①かぐや姫　②帝　③かぐや姫　④帝

問３　①私の身は、もしこの国に生まれてございますならば宮仕えさせなさる（こともできる）だろうが

②どうしてそのようなことがあるだろうか、いやない

③本当に普通の人ではないのだなあ

④それならば、御供としては連れて行くまい

⑤せめてそのお姿を（もう一度）見るだけでも（してから）帰ろう

問４　帝が、逃げようとするかぐや姫をしっかりとつかまえていること。